

玉葛

禅竹作

前

ワキ 旅僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 玉葛の内待

地は 大和

季は 九月

ワキ詞

「是は諸国一見の僧にて候。我此程は南都に候ひて。

靈仏靈社残りなく拝みめぐりて候。又是より初瀬

詣と志して候。

道行

「檜の葉の。名におふ宮の古事を。く。思ひつゝ

けて行末は。石上寺ふしをがみ。法のしるしや三

輪の杉。山本ゆけば程もなく。初瀬川にも着きに

けり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。初瀬川に着きて候。心静に参詣申

さうずるにて候。

シテ一声

「程もなき。舟の泊りや初瀬川。上りかねたるけし

きかな。

サシ

「舟人も誰を恋ふとか大島の。うらかなしげに声た

てゝ。こがれ来にける古への。果しもいさや白浪

の。よるべいづくぞ心の月の。御舟はそこと果し

もなし。

下歌

「唯我ひとり水馴れ棹。雫も袖の色にのみ。

上歌

暮れてゆく。秋の涙か村時雨。く。古河野辺の
さびしくも。人や見るらん身の程も。なほ浮舟の
楫を絶え。綱手かなしき類ひかな。く。

ワキ詞

「ふしぎやな此河は山川の。さも浅くしてしかも漲
る岩間づたひを。ちひさき舟に棹さす人を見れば
女なり。そも御身は如何なる人にてましますぞ。

シテ詞

「是は此初瀬寺に詣でくる者なり。又此川は所から。
名に流れたる海士小舟。初瀬の川とよみおける。

其河の辺の江にしあるに。不審な為させ給ひそと
よ。

ワキ

「あらおもしろの言葉やな。げに海士小舟初瀬とは。
古き詠めの言葉なるべしさりながら。又其類ひも
浪小舟。さして謂のあるやらん。

シテ

「いや何事のそれよりも。先御らんぜよ折柄に。

地

「ほの見えて。色づく木々の初瀬山。く。風もう
つろふ薄雲に。日影も匂ふ一しほの。さぞな気色

もかく河の。浦わの詠めまで。げにたぐひなや面白や。川音きこえて里つゞき。奥もの深き谷の戸に。つらなる軒を絶々の。霧間に残す夕べかな。く。かくて御堂に参りつゝ。補陀洛山も目のあたり。四方のながめも妙なるや。紅葉のいろに常磐木の。二本の杉に着きにけり。く。

シテ詞「是こそ二本の杉にて候へ能々御らん候へ。」

ワキ詞「さては二本の杉にて候ひけるぞや。二本の杉の立

所を尋ねずは。古河の辺に君を見ましやとは。何とよまれたる古歌にて候ふぞ。

シテ「是は光る源氏のいにしへ。玉葛の内侍此はつせに詣で給ひしを。右近とかや見奉りてよみし歌なり。共にあはれと思しめして御あとを。よく弔ひ給ひ候へ。」

地クリ「げにや有りし世を。猶夕顔の露の身の。消えにしあとは中々に。何なでしこの形見も憂し。」

シテサシ

「あはれ思ひの玉葛。かけてもいさや知らざりし。

地

「心尽しの木の間の月。雲井のよそにいつしかと。

鄙の住居の憂きのみか。さてしも堪へてあるべき身を。

シテ

「猶しをりつる人心の。

地

「あらし浪風立ち隔て。

クセ

「たよりとなれば早舟に。乗りおくれどと松浦がた。唐船を慕ひしに。心ぞかはる我はたゞ。浮島

を。漕ぎ離れても行く方や。何く泊りと白波に。

響の灘も過ぎ。思ひに障る方もなし。かくて都の

内とても。我は浮きたる舟のうち。なほや憂き目

を水鳥の。陸にまどへる心地して。たづきも知ら

ぬ身の程を。思ひ歎きて行き悩む。足曳の大和路

や。唐までも聞ゆなる。初瀬の寺に詣でつゝ。

シテ

「年もへぬ。いのる契りは初瀬山。

地

「尾上の鐘のよそにのみ。思ひ絶えにし古への。人

に二度ふた本の。杉の立ちどを尋ねずは。古川の
べと詠めける。今日の逢ふせも同じ身を。思へば
法の衣の。玉ならば玉葛。まよひを照らし給へや。
ロシギ地「げに古き世の物語り。聞けば涙も籠江に。こもれ
る水のあはれかな。

シテ「あはれとも。思ひは初めよ初瀬川。早くも知るや
浅からぬ。

地「縁にひかるゝ。

シテ「心とて。

地「たゞ頼むぞよ法の人。弔ひ給へ我こそは。涙の露
の玉の名と。名のりもやらず為りにけり。く。

(中入)

ワキ詞「さては玉葛の内侍かりに頭はれ給ひけるぞや。た
とひ業因おもくとも。

歌「照らさゝらめや日の光り。く。大慈大悲の誓ひ
ある。法の灯あきらかに。亡き影いざやとぶらは

ん。く。

後シテ一声

「恋ひわたる。身はそれならで玉葛。いかなる筋を
尋きぬらん。たづねても。法の教へに逢はんと。
心ひかるゝ一筋に。其まゝならで玉葛の。みだるゝ
色は恥かしや。つくも髪。

地

「つくも髪。我や恋ふらし面影に。

地

「立つやあだなる塵の身は。

シテ

「はらへどく執心の。

地

「ながき闇路や。

シテ

「黒髪の。

地

「飽かぬやいつの寝乱髪。

シテ

「むすばゝれゆく思ひかな。

地

「げに妄執の雲霧の。く。迷ひもよしや憂かりけ
る。人を初瀬の山おろし。はげしく落ちて露も涙
も。ちりぐに秋の葉の身も。朽ち果てね恨めし
や。

シテ「うらみは人をも世をも。」

地

「恨みは人をも世をも。思ひ思はゞ唯身ひとつの。
報いの罪やかずかずの。憂き名に立ちしも懺悔の
有様。あるひは湧きかへり。岩もる水の思ひに咽
せび。あるひは焦るゝや身よりいづる。玉とみる
まで包めども。蛸にみだれつる。影もよしなやは
づかしやと。此妄執をひるがへす。心は真如の玉
かづら。く。長き夢路はさめにけり。」